



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

Ver.2-016号

同志社大学と「リベラルアーツ教育」



松岡敬学長と佐藤優の対談形式の『いま大学で勉強するということ』(岩波書店)の第二章は、「なぜ教養教育が必要なのかー世界人材を育成するー」である。

今号は「教養教育」即ち、「リベラルアーツ教育」について調べたことをご報告します。

■教養教育とは？

「Liberal Arts Education、リベラルアーツ教育のこと。それは、縦割りの学問分野による教育ではなく、学問分野の枠に捕らわれずに、共通して求められる幅広い科目を提供すること。」で定義は終わっていない。

続いて「豊かな人間性を養うこと。自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材を育てることを理念とする教育。」と続くのである。

理論物理学者のアルベルト・アインシュタイン博士は「リベラルアーツ教育の価値は、教科書に書かれている事実をただ学ぶのではなく、様々な物事について自ら考えようとする心を養うことにある。」と捉えている。

学ぶ方法としての理解だけでなく、その目的に注視すべきなのだ。

■なぜ「教養教育が必要か？」を本書では次のように書いている。

「社会では答えはいつも一つではない。答えに至る過程をどう見るかが重要」従って、多様な解や思いもよらない答えを見出すことが重要になる。「多様な解や思いもよらない答えを導き出す手がかりになるのは豊富な知識や経験である。」「教養教育というのはその力を与える重要な鍵なので」「幅広い知識を有するという意味で、教養の力というのは。実は思いもよらない答

えを導き出す道しるべになる、とても大切」なものだ。

知識や経験、教養によって豊かな発想や奇抜な発想にも通じるということだ。

■文科省の考えの変化 <1991年の大学設置基準の大綱化>

「我が国の大学における教養教育は、戦後、米国の大学のリベラルアーツ教育をモデルに一般教育として始まった。新制大学は、一般的、人間的教養の基盤の上に、学問研究と職業人養成を一体化しようとする理念を掲げており、このため、一般教育を重視して、人文・社会・自然の諸科学にわたり豊かな教養と広い識見を備えた人材を育成することが目指されたものである。」こうして出発した一般教育であったが、幾つかの問題も生じた。

その原因は、昭和31年から平成3年までの大学設置基準において人文科学、社会科学、自然科学、外国語、保健体育などの授業科目の区分やその履修単位などが一律に定められていたが、多様化した大学の実態に適合していなかった、と考える。

そこで、文科省は平成3年(1991)に大学設置基準を変更し、授業科目の区分や単位数の定めなどを弾力化し、かつ、これらを各大学の自主的な取組にゆだねることとなった。

■同志社大学の対応

上記の大学設置基準の変更に伴い、同志社大学では、教養科目の扱いを各学部委ねた。その結果、各学部は専門性を高める方向に舵を切った。

しかし、注目すべきことは、全学部を通しての改善にあった。それは全学生が履修できる「全学共通教養教育科目」を設け、その中に「同志社科目」という科目群を設置したことである。この科目には、「建学の精神とキリスト教」や日本の近代化とキリスト教に関わる内容などの内容がある。

詳細は https://cgle.doshisha.ac.jp/3subject_group/doshisha_sg.html#Wrapper を参照。

この科目で全ての学生が同志社の歴史や建学の理念を学ぶことが出来るようになった。このようにこの科目は、同志社での教育の特色をしっかりと創り上げようという考えに基づいた科目で、徳育の視点も含めて、社会に出たときに重要な意味を持つてくるのである。

■リベラルアーツとビジネス

神学部の小原克博教授の近著『世界を読み解く「宗教」入門』p.176～177 に次のような記述がある。

「異なるものが出会うことによって生じたダイバーシティが、既存の「知」を流動させ、再構築する。学問の世界にとどまらず、ビジネスの世界においても、ダイバーシティを背景にしたリベラルアーツ的な「知」の刺激が、長年のルーティン・ワークを根本的に見直すきっかけを

与えてくれるはずです。」(中略)「多様性へ導いてくれるリベラルアーツ的な学びは、ビジネスの領域においても有用ではないでしょうか。」

従来から「異質の情報の統合から新しい発想が生まれる」と言われてきたが、それを可能にする基礎がリベラルアーツ教育にあるということである。

■同志社大学とアーモスト大学

校祖新島襄は全米屈指のリベラルアーツ・カレッジであるアーモスト大学に学び、1870年に卒業している。そこで学んだものを出発点に同志社を創設しているの、リベラルアーツ教育を重視してきたし、教育のファンダメンタルは非常に良いものがあるのだ。

同志社大学とアーモストの絆は何を意味するか。藤倉 皓一郎司法研究科特別客員教授はつぎのように語っている。

「アーモスト大学は、村の人たちが牧師を養成するために自分たちの手で建てた大学でした。それは牧師にふさわしい人を育てるための大学として始まりました。聖書の理解を深め、人格を鍛錬し、総合的な判断力を養う全人教育を行うリベラルアーツ・カレッジ(単科大学)でありました。現在でもその教育理念は変わっていません。アーモスト大学は、人文社会科学・自然科学・医学・法学などの専門学部を擁するユニバーシティ(総合大学)ではありません。専門知識の基礎となる教養を身につけ、自分で考えることのできる人間を養成しようというものです。」

アーモスト・同志社プログラムの第1回学生代表であったニコルズの母親やアーモスト大学の卒業生からの寄付によって建てられた「アーモスト館が同志社に寄贈されたのは1932年です。その当時、アメリカと日本の関係は非常に悪化していました。まもなく日米の間に戦争が起こる、その前夜にあたる時期でした。そのときに、ニューイングランドの小さな大学の学生と校友が新島襄とニコルズを記念する建物を同志社に贈るための募金運動を起こし、成功させたのです。このことは同志社人の記憶に深く刻むべきことだと思います。」

アーモスト館にはその由来を記す二つのタブレットがあります。一つは新島襄、もう一つはニコルズ・タブレットです。新島タブレットには次の言葉が英文で刻まれています。「新日本の英雄的開拓者、米国の熱心な友、アーモスト大学の輝かしい息子、同志社大学の創設者である、ジョセフ・ハーディー・新島を記念し、彼の精神を象徴し、日本と米国、同志社とアーモストの、友情を深めるために、この館を献げる」(北垣宗治著『新島襄とアーモスト大学』556-7頁)。

アーモスト大学へ留学する機会について触れておく。1954年に「新島スカラーシップ」が誕生し、1984年には「同志社新島スカラーシップ」が設立したことから毎年1名であるがアーモスト大学へ派遣されることになっている。

.....

新島襄が学んだアーモスト大学の記憶をアーモスト館が引き継ぎ、一人ではあるが留学生が絆を繋いでいる。しかし、目に見えないが同志社教育の中にリベラルアーツの思想が生き続け、卒業生に宿り、ビジネスの場で新しい発想を生んでいる。この連鎖を信じていきたいものだ。

